

青年期の自己愛傾向と養育態度認知・母親イメージの関連

— 母子画を用いて —

21012FRM 江里口 紗希

キーワード：自己愛傾向・養育態度認知・母子画

1. 問題と目的

近年自己愛傾向は、「誇大型自己愛傾向（以下、「誇大性）」と「過敏型自己愛傾向（以下、「評価過敏性）」の2つに分類されている（中山・中谷, 2006）。誇大性は、自己に夢中、注目の中心にいる必要があること、評価過敏性は周囲の人々の反応に過敏、注目の的になるのを避けるといった特徴がそれぞれ挙げられる（Gabbard, 1989；1994）。自己愛傾向は青年期に高まるとされ、それに伴い自己評価が揺さぶられる。安定した自己評価を得るため、青年期の自己愛傾向を捉えることが重要とされている。

自己愛傾向に影響を及ぼす要因として、養育態度に対する認知が挙げられる。しかしながら、自己愛傾向がどのような親の養育態度認知と関連しているのかについて一定の知見が得られていないことが問題とされている。そこで本研究では、青年期後期に属する大学生を対象に、小学校時代までの母親からの養育態度認知が自己愛傾向に与える影響について調査を行う。さらに、天幸・吉澤（2021）の結果によれば、養育態度認知と自己愛傾向には男女差が見られる可能性がある。そのため本研究では、対象者全体での比較と男女別の比較をおこなう。

II. 研究1

1. 方法

調査対象者：A大学の大学生・大学院生133名のうち、主たる養育者に「母親」を選択した118名（男性21名、女性97名、平均年齢20.99歳）のデータを分析対象とした。

質問紙の構成：①フェイスシート、②子どもの認知する親の養育態度尺度（姜・酒井, 2006）、③評価過敏性-誇大性自己愛尺度（中山・中谷, 2006）④面接調査の依頼、⑤自由記述欄で構成された。

2. 結果

全体で、各因子間の相関係数を調べたところ、養育態度認知の「教育」と自己愛傾向の「評価過敏性」で有意な負の関連が見られた。その後養育態度認知の「受容」と「教育」の高低によって自己愛傾向に有意な差が見られるのか確かめるため、2要因分散分析を行った結果「教育」に主効果が見られた。次に、自己愛傾向の男女差について調べるため t 検定を行った結果、評価過敏性に有意な差が見られたため、性差の検討を行った。その結果、女性では「教育」と評価過敏性との間に非常に有意な負の関連が見られたが男性では有意な相関は見られなかった。女性と男性でそれぞれに養育態度認知の「受容」と「教育」の高低によって自己愛傾向に有意な差が見られるのか確かめるため、2要因分散分析を行った結果、男性については、有意な差が見られなかったが女性の評価過敏性において「教育」に主効果が見られ、誇大性において交互作用が有意な傾向にあった。そこで、単純主効果の検定を行った結果、養育態度認知の「受容」の単純主効果が「教育」の低群の場合において有意であり、受容高群の方が受容低群よりも誇大性の得点が有意に高かった。

III. 研究2

1. 問題と目的

研究2では質問紙では測り得ない養育態度認知と自己愛傾向の関係がある可能性について、詳細に検討すべきであると考えられた。そのため母親のイメージを捉えることを目的に、対象関係論を理論的背景とした投映法として母子画（Gillespie, 1989）を用いて検討することにした。

2. 方法

調査対象者：研究1にて研究2実施に関する依頼書に必要事項を記入し、後日承諾が得られた20名（男性1名、女性19名）に対して母子画を

実施した。研究 1 にて性差が認められたことから、本研究では女性 19 名（平均年齢 20.16 歳）を分析対象とした。

分析手続き：母子画の指標として、「身体接触」は最も客観的判断が可能とされている。西田・松下 (2009) の指摘より、身体接触を質的にもとらえる観点が必要であることから、本研究ではあらたに「母子 2 人の間に慈しみ・思いやりが想起される、もしくは、行動的に母が子に包み込まれている様子が描かれているもの」の総称として「あたたかみ」と定義した。その後 19 名のあたたかみ得点の中央値 ($M = 2.6$) をとり、中央値以上のものを「あたたかみあり群」、中央値未満のものを「あたたかみなし群」とした。

3. 結果

あたたかみの群分け後に研究 1 で行った質問紙調査の自己愛傾向の 2 因子について、それぞれ中央値にて高群と低群に分類した。あたたかみと自己愛傾向で、 t 検定をおこなった結果 (表 1)、評価過敏性では、あたたかみあり群とあたたかみなし群の得点の差に有意な傾向が見られた。誇大性では、あたたかみあり群とあたたかみなし群において差が見られなかった。評価過敏性については傾向にすぎず、誇大性では有意な差が見られなかったため、あたたかみあり群、あたたかみなし群の 2 群間での母子画の比較を行った。あたたかみあり群とあたたかみなし群から、それぞれ養育態度認知から想定できる母子画と、想定のできなかった母子画 1 事例ずつの計 4 事例について取り上げ、事例検討を行った。

4. 事例検討

あたたかみあり群とあたたかみなし群における母子画の違いについて、あたたかみあり群の方が母親の表情に情緒性が感じられるところが共通していた。また事例 A さんは「寛大」な養育態

度認知をしており、実際に母親像が子ども像を抱え込む様子が描かれた。事例 B さんと事例 C さんの養育態度認知は「無関心」群で、母親像が子ども像の事をあまり考慮しない様子が描かれた。事例 D さんの養育態度認知は「権威的」で、母親像が子ども像を監視するような様子が描かれた。青年期の女性において、養育態度の認知と、内在化された母親像とで大きな差がなく、また描画を用いることで質問紙だけでは読み取ることが難しい、より細かな母親との関係性について表象されることや自己愛傾向も合わせて見ることによって養育態度だけでない母子画の差があるということが示唆された。

IV. 総合考察・今後の課題

研究 1 と研究 2 を通して、青年期の女性には、母親の養育態度をどのように認知し、どのように内在化しているかによって自己愛傾向、特に評価過敏性に差があることが示唆された。誇大性の自己愛傾向については、研究 1 では養育態度認知との関連が有意な傾向が見られたが、研究 2 では母親イメージとの中で関連を示すことができなかった。しかし、母子画を用いて多面的に母親との関係性や母親イメージを捉えることによって、母子画と自己愛傾向との関連がある可能性が示された。また、母子画は比較的新しい描画法であり、国内の研究数も多くない。本研究で自己愛傾向が母子画に表象される要因として、新たな知見が得られたと考えられる。今後の課題として、母子画の一般的傾向と照らし合わせるための量的な研究を行うことが挙げられる。また、研究 1 で見られた男女差について、男性の協力者が十分に得られず検討を行うことができなかった。男性における母子画にも、自己愛傾向との関連で女性とは異なる特徴が表れる可能性が示唆されるため、再調査によって明らかにしていく必要がある。

表 1 あたたかみと自己愛傾向の各得点の M(SD)および t 検定結果

	あたたかみあり ($N=11$)		あたたかみなし ($N=8$)		t 値
	M	SD	M	SD	
評価過敏性	22.64	8.08	29.13	6.27	1.891 †
誇大性	24.27	5.16	20.50	2.95	1.221 <i>n.s.</i>

† $p < .10$